綾のピアノ日記

—第 1 回—

西沢　綾

綾のピアノ日記　連載にあたって

綾ちゃんこと長野県小布施町に住む西沢　綾さんとピティナとの出会は，今から約５年前に逆のぼる。当時小学校４年生だった綾さんのおかっぱ姿が，目に浮ぶ。

それから５ケ年の間に彼女から何通のお手紙を頂いたであろうか。ピアノ鍵盤の上を走る綾さんの指の速さに匹敵した彼女の筆の速さには驚くものがある。

今から丁度２年前の１月に私は，長野県に赴く折があって，綾さんのお宅に泊めていただいた。その時『ピアノ日記』と書いたノートを読ませて頂いたのである。爾来いつかこのすばらしい文章を，同年代のヤングピアニストたちにも読んでいただきたいと考えていた。ここにようやくその時が来て，本人の許しを得，連載できるのを心からうれしく思っている次第である。

掲載にあたって次のことに留意した。

(1)小４時の文章の為，漢字の使用が少ないが，原文尊重の立場をとって，そのままひらがなで表し，意味のとりにくいところのみ（　）内に漢字で表わした。

(2)タイトルは，すべて綾自身が書いたものである。また原文は，縦書きで書かれていて，数字も漢文字であったものを，横書きとしたため算用数字を用いた。

(3)各日の日記後の◆は，私，福田靖子がこの日記を読んだ時点で綾の日記帳そのものに，書き添えておいたものである。また（註）は，この連載に当り編集時に書き加えたものである。

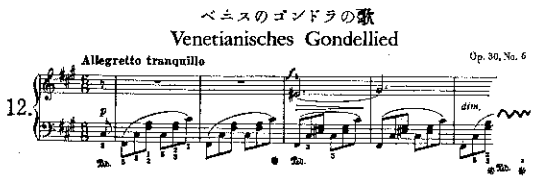
福田　靖子　記す

さ さ ぶ ね　52・8・14（小４）

コンクールに使う，メンデルスゾーンの‘‘ベニスの舟歌,,えいへ短ちょう作品30の６を練習していた。

今までは，舟歌だということだけを頭においてひいていたが，今日，ただひくだけではいけない‘‘自分が舟にのっていることを頭にうかべ，ひょう子（拍子）にあわせてなみ（波）のゆれるかんじや，舟のゆれるかんじを出さなければ,,ということに気づいた。

しかし，それを出すにはどうしたらよいか考えた。



そこで思いついたのは　ささぶねだった。うら口から　ささの葉を一まいとってきて，庭の大きなお池にうかばせて，そのゆれるようすを　そのまま曲に　くみ入れようというのだった。

さっそく　ささをとってくると　いいかげんに作ったささぶねを作り，お池にうかばせた。

ささは，ゆっくり　ゆっくり　すすんでいったが，急に早くはしり出した。

また少しゆっくり……

そんなことを　くりかえしていると，セミがなき出した。

‘‘あの曲にも虫のないているような場面があったな。トリルの出てくるとこ……。トリルは，ささぶねのうごき，つまり左手にじゃましちゃいけないんだ。,,と思った。

そしたら，ささぶねのうごきが　ゆっくりゆっくり　してきて，やがてとまった。

‘‘さいごは　もっとゆっくりしてから　しずかにとめる方がいいな。,,いろいろ感じた。

へやにもどって，もう一度‘‘ベニスの舟歌,，をひいてみると，曲の感じがまるでかわった。うんとゆったりしてきて　よくなった。
‘‘ただひくだけより見たり考えたりしてやった方がいいんだな。こう考えると　遊びは大切だな,，と思った。

◆ 子供は遊びから創造的なものを育てると言われます。ささぶね遊びができる環境に生れうらやましいかぎりです。54・1・15

(註)文頭にでてくるコンクールとは，1977年ピティナヤングピアニスト　オーディションのことで，初めてのピティナのコンペティションのことである。どこでピティナ　コンペティションの開催を，綾が知ったのか？。ベニスの舟歌は，B級のロマン期の課題曲であった。

まりつき　52・8・15

今日は，コンクールに使う，バッハ　インベンション二声の四番のことについてをかく。

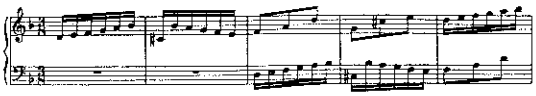
きのうかいた‘‘ベニスの舟歌,，は，舟歌だから‘‘舟,，のことを思いうかばせれば　いいということがすぐわかった。

が，バッハは，何も題がないので　何のかんじか今までは　わからなかった。

しかし，今日は，一度ひいただけで‘‘そうだ，ただひくんじゃなくて，まりをついていることを思いながらひけばいいや,，と思った。

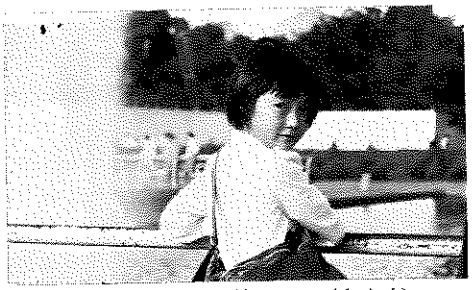
本当に，この曲は　まり　をついているようなひょう子（拍子）がないとつまらない曲なのだ。さっそく，庭に出て　ちっちゃな　ソフトボールをついた。

Inventio 4
BWV 775



—どつけば，地面にポンとおっこちて　またあがる。もう一ど　つけば　また　リズムよくボールがあがってくる。

‘‘そうだ　このボールのように，音楽はひつようい上に（必要以上に）よけいなアクセントがついちゃ　いけないんだ。もっと　リズミカルにポンポンした太った音で　ひかなければ　いけないんだ,，と思った。



▲噴水の前に立つ綾ちゃん（小4時）

ふと，ボールが　コロコロところがった。とてもかるいかんじ（軽い感じ）だった。

‘‘この曲には，右手と左手と一回ずつ　長いトリルがあったな。あそこは，もっとボールが，ころがるように　ひかなけりゃいけないんだ,，

いろいろなことを頭にうかべた。

これならきっと　あの曲がいきいきしてくるぞ！

‘‘よく「コンクールや発表会の前は勉強（レッスン）するより　遊ぶ方がよい」というけれど，それは，こういうことなのか,，と思った。

コンクールで，東京へいくとき，舟をうかばせてみたり　まりつき　をしたりしようと思った。

(註)文頭二段のあと，行間があいているが，これは，綾自身の日記の体裁そのものである。1977年のB級バロック期課題曲のバッハ・インベンション4番について，小学校4年のヤングが，これだけの発見をしたとは，私自身教えられたことである。

文末の「東京へ行く時」とあるのは，1977年当時まだ，長野では予選が行われていなくて，8月末にある東京での第一次予選に向っての練習の模様のことである。

募ります

綾の日記は，これから毎号連載します。読まれての御感想，お手紙などお寄せ下さい。その他，ヤングピアニストたちの，日記，作文，読書感想文，音楽会を聴いての感想文，絵，なんでも，お送り下さい。

表紙の絵

神奈川県茅ヶ崎市に住む小林香織さん（13才）の絵。これは，東京ピティナ専門コースのソルフェジュ教室での，音楽鑑賞の時間に画いた絵です。ピアノは佐野幸枝先生に師事。